

# 美術工芸品

絹本著色法然上人像

一幅（絵画・指定）

京都市左京区黒谷町一二一

宗教法人金戒光明寺

法量 縦一一・三・四センチメートル、横八三・〇センチメートル  
品質構造 絹本著色掛幅装（一副一鋪）

時代 鎌倉時代

保存状況 全体に亘って、料絹の細かい欠失や絵の具の剥落が見られ、左目や衣の裾など各部が失われている。畳の角が画面の枠で切り取られており、画面の左右端は、やや切り詰められたかと思われる。

記 録（図上色紙型賛文）

「我 □（本）因地

以 念 佛 心

入 無 生 忍」（第一紙）

「今 於 此 界

攝 念 仏 人

歸 於 淨 土」（第二紙）

（旧軸木墨書）

「奉寄進此金軸為 道有／妙春 菩提也

寛永二曆 乙／丑 卯月十五日住持伝蓮社桑誉了の 表具師 中西

慶観」

図 様 側面丸紋一重半の高麗縁の厚畳上に坐し、唇を閉じて、画面向かって右斜め下に視線を降ろす。右手は第四指までを曲げて軽く数珠に手をかけ、小指を伸ばす。左手は、親指と人差し指で数珠を掴み、その他

の指は曲げて数珠にかける。体には、白の内衣と墨染の無地の衣を着け、同色無紋の袈裟を纏う。左肩から腹部にかけて袈裟ひもをかけ、胸前で結ぶ。画面右上隅には、青と赤で塗り分けられた二枚の色紙型を区画し、金泥で描かれた草や蝶の文様の上に、賛文を墨書する。画面上下端には、内側を白、外側を青で塗り分けられた絵の具の線が残されている。

法然房源空は、平安末から鎌倉初期にかけて活動した僧侶で、浄土宗の開祖として知られる。法然の肖像は、生前に何度か描かれ、弟子たちに与えられたとされるが、いずれも現存せず、いくつかの系統の写しが伝えられている。その中で、本図が「鏡御影」と呼ばれるのは、四十八巻本『法然上人絵伝』（知恩院蔵）の巻八第七段に見える記述に由来する。すなわち、弟子の勝法房が、法然の肖像を描いて図上に賛を求めたところ、法然は鏡を見ながら絵の一部を胡粉で修正し、賛は加えずに一旦返した。その後再び賛を求めたところ、法然は、『首楞嚴経』の勢至菩薩円通の文を書き与えたので、勝法房は絵の上にそれを貼り付けたとするものである。詞書の記述される賛文と、本図の図上の賛文とは一致しており、本図がこうした『首楞嚴経』賛文系統の画像であることを示している。また、同じ段の詞書中には、法然の直した画像が貴重なものであるため、これを写しておいたとの記述があり、この系統の画像の写しが実際に制作されていたことを物語る。

恐らく当初からのものと思われる色紙型は、群青と朱かと推測される絵の具で区画した上に、金泥で草や蝶の文様を描き、やや肉厚の力強い書体で賛文を墨書する。この下絵の蝶の文様は、例えば弘安五年（一二二二）の『西園寺実氏夫人逆修願文』（東京国立博物館所蔵）に見られる蝶の描写と近似しており、近い時代の料紙装飾であることを窺わせている。

像容は、うつむき加減に上畳に座し、両手で数珠をまさぐる法然像の定型に属しており、扁平な頭頂の形や、まばらなひげの描写が特徴的である。衣文の輪郭線は、肥瘦の少ない均一な太さの墨線で描かれ、面部は、細線を巧みに用いて、

丁寧な各部位を描写している。ただし、左肘の衣の外側には、本来畳の線が続くはずであるが、その部分は描かれておらず写し崩れを思わせる。

こうした法然像の定型が確立されるのが、四十八巻本『法然上人絵伝』の成立に先行する、十三世紀末頃と考えられ、本図の制作年代もその時期を想定することができる。その背景には、しばしば言われるように、浄土宗教団が組織として確立される過程で、法然伝や画像が、教団の求心力を高める機能を果たすために必要とされていたことが挙げられよう。法然の画像としては、現在確認されている中で、最も時代の古いとされる鎌倉時代制作の二尊院本（重要文化財）があるが、本図は、それと比較してもさほど時代が下らず、鎌倉後期にさかのぼる肖像画の優品として、また、『首楞嚴経』の賛文を有する現存最古の法然画像として、極めて貴重なものである。

なお、近時修理の際に取り出された旧軸木には、寛永二年（一六二五）の修理銘が墨書されている。そこに名前の記されている桑誉<sup>そうよ</sup>了<sup>りょう</sup>的<sup>てき</sup>は当時の金戒光明寺住職であり、この時期本画像が金戒光明寺に伝来していたことを物語る。また、現在の金軸は、墨書銘にある通り、この時寄進されたものと考えられる。

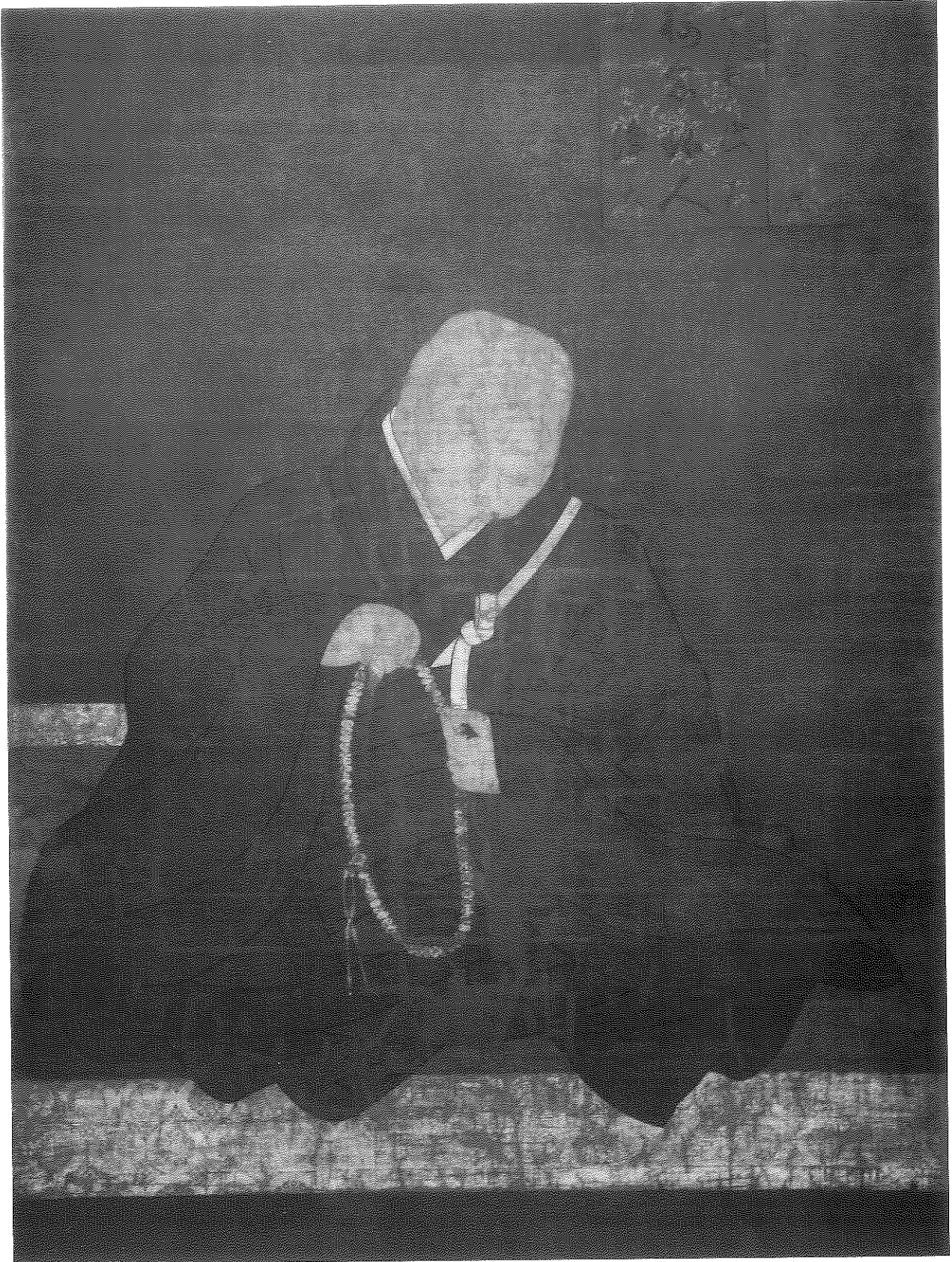
（筒井忠仁）



軸木



色紙型



絹本着色法然上人像

木造兜跋毘沙門天立像

一 軀 (彫刻・指定)

京都市上京区寺町広小路

宗教法人廬山寺

法 量 総高 一三〇・五 像高 一〇二・五 頭長 二一・六

面長 一〇・五 面巾 一一・九 面奥 一五・四

肘張 五八・二 胸厚 一六・八 腹厚 一八・〇

腰張 一八・三 腰厚 二〇・八 (単位：センチメートル)

形 状 単髻を結び、三面の宝冠を戴く。天冠台(ヒモ二条・列弁文)を表す。

怒髪三条両側に立ち、巻髪が耳にかかる。曠目。開口し、上齒列を見せる。右手屈臂して、腰に当て、左手は上方に掲げて戟をとる。領巾、胸甲、甲締具、表甲、前楯、腰帶、天衣、裙、袴、脛当、沓を彫出する。両胸甲とみぞおちの甲締具に丸い鬼面、腹帶上部に両腕を下げた帯喰を表す。

地天女は、髪を中央で分けて左右に垂らし、三頭の髻を結う。衣と背面腰帶を彫出。両手を顔の横に掲げて手のひらを上に向け、毘沙門天像の足を支える。

品質構造

木造(ヒノキか)、一木造、彩色、現状古色を呈する。頭頂から地天女まで主要部を一材から彫出。ただし、右足付け根から先、左足指先及び地天女指先は別材を刻ぐ。像底内部には、高さ一三・五センチメートルのウ口状の空洞があり、柄穴を開けた後世の補修材を当てて閉じている。腰には天衣取り付けの跡が見られる。

時 代

平安時代

保存状況 両肩から先、右足付け根から先、左足沓先、地天女指先、表甲下端の一部は後補。兜上端の一部欠失。像全体に亘って、擦損、虫蝕の痕跡が認められる。地天女の腹部、背面、両脚部、像底に古い補修の跡がある。

廬山寺は、天慶年間に延暦寺座主元三大師良源が北山に創建した予願金剛院に始まる寺院で、寛元元年(一二四三)に法然の弟子である覚禱が再興し、廬山天台講寺と名を改めた。今の地に移されたのは、天正年間で、豊臣秀吉の寺町造営の時である。明治期までは、多くの末寺を有したとされ、本像は、同じく現在廬山寺所蔵の如意輪観音像とともに、末寺の一つである金山天王寺の所蔵であったと伝えられる。

本像は、地天女の手のひらの上に立ち、宝冠をいただく姿で表されており、一般に兜跋毘沙門天像と呼称されている。ただし、中国から請来された東寺所蔵兜跋毘沙門天像に見られるような、特徴的な海老甲や、金鎖甲などは、彫出されていない。石山寺蔵兜跋毘沙門天像のように彩色によって甲制を表現する例もあるが、現状では確認されない。また、以前は確認されたと言われる宝冠正面の鳥の彩色文様は、事実であるとすれば、東寺像に彫出される文様との類似を見せるものであるが、これも現状では見出せない。また、兜跋毘沙門天像はしばしば手のひらに宝塔を載せるのであるが、現状では、左手に戟を持ち、右手を腰に当てている。この形式は、般若祈禱羅刹の毘沙門天儀軌の中に説かれる毘沙門天画像の姿と一致しており、本像は、珍しい彫刻の作例として注目される。

像は、頭頂から地天女までを一材から彫出し、像底に洞状のわずかな空間があるが、意識的な内刻りは認められない。また、木心は、後頭部の後方に外されている。直立して、動きの少ない像容であるが、全体に奥行きのある表現は、量感を与えている。內衣の立ち上がる衿の彫技は鋭く、隆起した筋肉を表す顔貌の表現も優れた出来栄を示している。また、腹部の帯喰が、両腕を下げて天衣を掴む表現は、特徴的である。時代は下がるが、東福寺法堂所在の四天王中に、獅嘯が両腕を見せる表現があるものの、一本角の鬼が腕を伸ばして天衣を掴むような表現は見られず、その点で本像は他に類を見ない。全体に綺麗に整えられた平安中期の三尺像の美作で、制作年代は、十世紀後半から十一世紀初頭にまでさかのぼると考えられ、特徴ある表現を持つ、古作の毘沙門天像の優品として、指定に値する。

(筒井忠仁)



背面



木造兜跋毘沙門天立像



腹部



面部